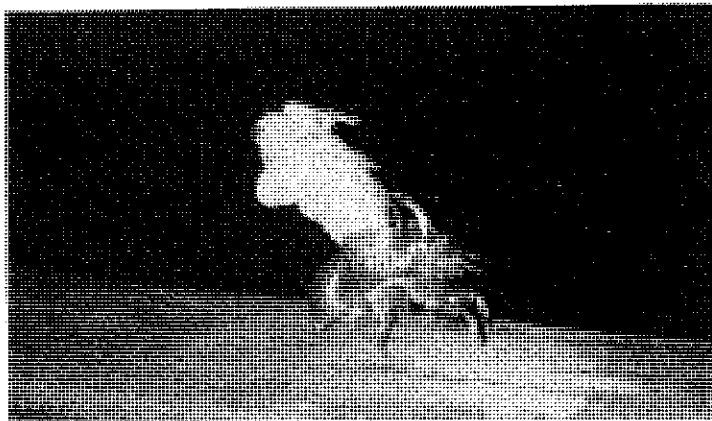


外手児童館夏休み野外活動報告

児童館初！2泊3日のキャンプ～小学生高学年フレンドリークラブ～

今年も千葉県野田市にある清水公園キャンプ場に3～6年生計20名のメンバーでキャンプを行いました。この場所は今年で4回目になりますが、今年は初の2泊で行いました。1泊ではプログラム等々でどうしても余裕がなく、せっかくの野外体験も楽しみを感じた所での帰宅になってしまい、少々不完全燃焼になっていましたが、今回のように2泊ならば帰宅までに中1日あることによって、他校や異年齢との交流が今まで以上深まったり、昆虫や草花を観察出来たりと、各々地元では味わえない『発見』があったと思います。私自身小学2年生から7年間、区内のボーイスカウトに所属していて、当時のキャンプは今の世の中からは想像つかないほどとてもハードでした。道がない山にコンパスと地図だけで位置を確認し、(当時はGPS機能の物は無かったので)、草や枝、そして木の根っこを鉋やナイフで削り、そこにテントを張りました。今のドームテント(床と天井一致型)とは違い、紐で結んで繋げる物でした。(テントの周りには溝を掘って雨水の逃げ場を作り、この作業を怠ると、テント内に雨水が浸入してしまうのです。)トイレもちろんありませんので、穴を1メートル以上掘ってトイレを作りました。周りに布で囲いを作るのですが、天井はないもない為、昼は太陽が夜は月の光が照明の代わりでした。水道もない山奥ですので数キロ離れた民家や公園から一人2個のポリタンク(10キロ)に水を入れ、帰りは転がしたりしながら1日3回くらい険しい山道を歩いて運んでいました。そして最も過酷だったのは、あえて台風が来ている時に行うキャンプでした。ボーイスカウトのハンドブック(教科書みたいなもの)に台風時(悪天候)のキャンプ生活という項目があり、あらゆる場面でも対応出来るようにと3泊で行ったのですが、思った以上に台風の勢力が強くと、2泊目の夜中にテントが飛ばされ、1日早くの帰宅になったのですが、下山も酷く、道路は隣の川が氾濫してひざ上近くの水深になって、60センチくらいの野コイが何匹か泳いでいました。電車も全身濡れていた為、乗車拒否されそうになり、床に新聞紙を敷いてみんな固まって2時間くらい乗った事を今でも鮮明に覚えています。(事前に数多くの研修と実践を行っての参加)それに比べ、このキャンプ場は危険箇所も無く整備されながらも自然が多く残っている為、夜はキャンプ内のマス釣り場にカワセミやシロサギ、クロサギが飛んできて魚を捕ったり、そして今回の収穫はなんと言っても蟬が幼虫から成虫にかわる所をあちこちで見られた事です。児童館脇の若宮公園でも幼虫が木に登っている所はよく見かけますが、今回のような事は実は私自身も初めてで『生命の神秘』に子どもたちも静かにじっと見続けていました。たった2泊のキャンプでしたが、テント設営、アスレチック、キャンプファイヤー、ナイトハイク、それに食事作りと子どもたちには『何か』印象に残った事でしょう。普段の生活とは異なり、電気もなく、風や雨で揺れるテント、一生で一度の経験になってしまう児童ももしかしたらこのメンバーの中にもいるかもしれませんが、それでも今回キャンプに参加して、『これが出来たから』、または『これが見られたから』と大人になっても心の片隅に残ってくれればと企画した職員を含め私もうれしいです。そしてこのキャンプに参加して野外活動に興味を示してくれたら尚、うれしいのですが・・・。



文責 館長 森 裕樹

生育の原点

～中高生体験キャンプ～

山梨県北杜市高根町にあるあさひ福祉作業所(障害者授産施設)に3泊4日で行って来ました。このキャンプは法人児童館12施設合同キャンプで、20年以上の歴史があり、毎年夏の風物詩でもあります。また毎年5・10月に法人3年目職員(児童館・単独学童クラブ・保育園・幼稚園・障害者施設)が2泊3日で今回と同様の仕事をしに行きます。今回児童館から高校3年生の女子が参加しました。彼女はこのキャンプに魅力を感じ、6年連続で参加しています。私もこの施設とは、かれこれ20年以上のつきあいで、何度か夜中に30分くらい顔を出して帰る事を繰り返していましたが、仕事として参加するのは10年ぶりでした。

仕事内容は、鶏の世話、卵拾い、鶏糞取り、加工(殺して羽を取る)、鶏舎作り、しいたけ原木の入れ替え、畑仕事、パン作り等、障害者の方々が毎日行っている作業を手伝います。以前は豚や山羊もいたのですが、今は上記の仕事で障害者の生活費を稼いでいます。このキャンプは食育の原点が体験出来る、そして生命、働く事とは何かを考えさせられるキャンプだと私は思います。誰かが(生産者)動物の命を奪わなければ、お店や食卓に肉はあがりません。ここでは鶏舎で雛を育て、別の親鶏の鶏舎から卵を拾い、そして別の鶏舎からは鶏を箱に詰め、横の小屋に移動して首を切り、血抜きして熱湯の中に入れて、羽を取る。何て残酷な事だろうと読んだ人は思うかもしれませんが、コンビニやファーストフードで買うチキンは誰かがその鶏の命を奪い、加工し、調理し、店頭に並んだ物を私たちは買って食べている。ごく当り前の光景です。人間は生きていく動植物の命を頂かないと生命を維持出来ないのです。だからこそ、命の尊さを重んじて残さず食べなくてはなりません。動物だけではなく植物だって収穫した時に命を奪っているのです。そういう事を考えるだけでも食べるという行為が変わるのではないのでしょうか。今回1000羽以上いる鶏をもっと増やす為と、10年前に私が当時の中高生メンバーと作った鶏舎の老朽化の為、新しい鶏舎作りをしてきました。当時は車で数キロ移動して山に入って鶏舎作り用の木をチェーンソーで切る所から始め、甲府盆地の暑さと鶏糞の臭いとほこりの中で作業した事がとても懐かしく思いました。障害者の方々も私の事を覚えていて下さって作業しながらも昔話が尽きないキャンプでした。参加する中高生や時には職員さえもあの家畜独特の臭いに慣れず寝込んでしまう人も以前はいました。夜、窓を開けて網戸にしていると風と一緒に臭いが流れてくる時もありました。仕方ないことだと思います。都会には無い臭いですから。今の世の中でこういう仕事や障害者の社会参加は中々クローズアップされません。仕事の価値や賃金、福利厚生などを重視する事が仕事選びの基本で、また『障碍』という壁は大きく、健常者との格差を埋める手段は残念ながらこの21世紀の世の中でも進歩は余り見受けられないと残念ながら私は思います。この作業所を作った創立者の先生も元は障害者の自立を目的に釜一つで荒地を耕し、当初は、竹ほうきやシャーシ(カセットデッキの内部テープ受けを10枚重ねて11枚目を逆に重ねてゴムバンドで止める)のと鶏舎が主流でした。しかし、人件費が海外の方が安いという事で仕事がなくなり、畑や椎茸などに移行して今に至ります。毎日朝から夕方まで扇風機やエアコンも無い倉庫で、障害者は永遠同じ作業を繰り返して来ました。昔と比べ、仕事は余り変わらず、障害者も高齢化してきています。私は職員や中高生たちにこういう状況が現実にあるということは知っておくべきだと私は思います。私たちは3・4日と短い体験期間ですが、障害者は死ぬまでこの仕事なのです。それがどういう事なのかは理解して頂けると思いますのであえて省略しますが。上記の食育でも述べた『働く事とは何か』、『生きる事とは何か』、『ノーマライゼーションとは何か』、の数多くの答えがここにあり、人の成長に欠かせない『心を育む場所』だと私は思い、今後出来るだけ多くの人に参加して食育の原点を体験して頂きたいと願います。

文責 館長 森 裕樹